

保育者養成における「教職実践演習」の取り組み(1)

小山 優子 栗谷 とし子 白川 浩
(保育学科)

Seminar on Teaching Practice for Kindergarten
and Nursery Teachers in Junior College(1)

Yuko KOYAMA, Toshiko KURITANI, Hiroshi SHIRAKAWA

キーワード：教職実践演習 Seminar on teaching practice
資質能力の向上 the development of traits and abilities
保育実践力 practical teaching skills

1. はじめに

平成18年7月の中央教育審議会答申において、教員養成課程における学生の学びの質を向上させることを目的とした「教職実践演習」の新設と必修化が提言された。それを受け、幼稚園教員養成カリキュラムにも「教職実践演習」が新設され、本学でも平成22年度入学生から必修科目として開講することとなった。教職実践演習の科目の趣旨は、「他の教職課程の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として統合・形成されたかを、課程認定大学が自らの養成する教師像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置づけられるもの¹⁾」である。すなわち、2年後期に開講される教職実践演習は、幼稚園教諭としての資質や教師としての力量を深め確かめる、教員養成の総仕上げの授業として位置づけられるものである。

この授業の実施にあたっては、教員に求められる4つの事項、使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項、

幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、教科・保育内容等の指導力に関する事項、を含めることが適当であるとされている。また、授業方法は、講義だけでなく、ロールプレイングやグループ討議、実技指導、事例研究、フィールドワーク、模擬授業等を取り入れる、教科に関する科目担当教員と教職に関する科目担当教員が協力して実施する、教職経験者を指導教員に含め、学校現場の視点も加味した適切な評価が行われる、ことが挙げられる。このように、教職実践演習は、複雑で多岐にわたる授業目標や授業内容、授業方法に考慮した上で構成することが求められるが、実施上の方法的困難さを克服するために検討すべき課題は多い。

本研究は、保育学科学生に対し、授業担当者となる3名の教員で協議しながら、本科目の目的達成のためにどのような授業を展開していくことが適当か、またそこに横たわる課題とは何かを明らかにし、平成23年度後期の保育学科2年の授業実施に向けた詳細な授業計画を立案することを目的として進めたものである。なお、本学では授業科目名を平成23年度のみ「教職実践演習」、平成24年度以降「保育教職

実践演習」²⁾としているが、本稿では「教職実践演習」と表記する。

2. 研究の進め方

「教職実践演習」は、上記のように新設の授業科目であり、幼稚園教諭に求められる資質や基礎理論・知識、社会性や対人関係能力、保育や教科の指導力などの総合的実践力が、短大2年間の学びの過程で幼稚園教諭免許を取得しようとする学生全員が身につけているかどうかを確かめる科目ということ以外は、特に決まった枠組みはない。つまり、授業科目担当者が上記の趣旨に則り、学生の実態に即した授業計画を立案していかなければならず、文字通りゼロからのスタートとなる科目であった。そのため、教職実践演習の授業内容、シラバス及び具体的な授業の展開方法、担当教員間の役割分担や業務分担など、実施に向けた作業概要についての協議を行った。特に、履修カルテと学習ポートフォリオの作成と運用、シラバスの深化と修正、教職実践演習の授業内容の具体的な進め方、成績評価方法に焦点を当て検討を重ねた。

3. 履修カルテ・学習ポートフォリオの作成

1) 履修カルテと学習ポートフォリオの作成

履修カルテは、学生が教職や保育実践についてどのような知識や技術を身につけているのかを診断・評価するものとして、教職実践演習の履修前に学生が必ず作成すべきものとされている。本学においては、文部科学省から示されている履修カルテ例や、先行する他大学の履修カルテやポートフォリオを参考に、履修カルテの内容や様式、作成方法や提出時期などを検討した。

その結果、本学保育学科では、1年前期終了時を初回に、学生が半期ごとに記入した履修カルテを担当教員に提出して検印を受けること、記入に際しては、各期毎に作成した学習成果物を学習ポートフォリオとして綴じ込み、自分の成長過程を確認しながら自己評価することにした。学生には入学時に教職実践演習についての説明を行い、2年間を通じて使用する履修カルテ・学習ポートフォリオ用のファイ

ルの配布と、履修カルテの様式を本学ホームページからダウンロードして記入する方法を指導した。一方、保育学科教員をはじめ専門科目の担当教員には、学生が履修カルテを作成する際に、どの授業で何を学び、身につけたのかを確認できるように、各授業担当科目のシラバスに授業目標や到達目標を明確に記述すること、学生が各々の授業で作成したレポートや提出物は最終的に教職実践演習の学習ポートフォリオとして綴じていくことを説明し、こうした学習成果物については検印後、速やかに学生に返却することを関係教員での共通認識とした。

2) 履修カルテの内容

本学の履修カルテは「履修した科目に関する内容」と「自己評価シート」の2つの内容で構成した。

(1) 履修した科目等に関する内容

履修した科目に関する内容は、「教職に関する科目の履修状況」「教科に関する科目の履修状況」「教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目の履修状況」について、科目名、単位数、必修/選択の別、修得年度、教員名、成績評価、学習効果(学生が自己評価を自由記述)を記入することにした。その他の事項としては、「教育実習に関すること」、保育士養成関係の「保育所実習、施設実習に関すること」、「教育・保育に関する自主的な活動等」の欄を設定した。「教育実習に関すること」では、実習園名、実習期間、教育実習の学習成果や自己課題の記入、教育実習中の指導案のコピーを添付することにした。「保育所実習・施設実習に関すること」では、科目名、単位数、必修/選択の別、修得年度、実習施設名、成績評価、学習成果と自己課題を記入することにした。「教育・保育に関する自主的な活動等」では、幼稚園や保育所でのボランティア活動や学生支援員、サークル活動での遊びの指導など、教育・保育に関連する自主的な活動について、名称、期間、活動場所、活動内容、学生自ら学んだことを記入することにした。

(2) 自己評価シート

自己評価シートは、「教職に必要な資質能力についての自己評価」をするもので、学生が授業の履修

状況や自主的な学習活動に基づいて記入する。質問項目は、文部科学省中央教育審議会答申の4つの事項である「使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」「社会性や対人関係能力に関する事項」「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」「教科・保育内容等の指導力に関する事項」について、必要な資質能力の指標を37指標設定した(表1)。これらの指標に基づき、学生は1年前期終了、1年後期終了、2年前期終了、教育実習終了、2年後期終了時の5つの時期に自己評価を記入する。評価の基準は、「未学習(0点)」と、「全くできなかった(1

点)」「あまりできなかった(2点)」「ふつう(3点)」「よくできた(4点)」「十分できた(5点)」の5段階評定である。また、「教職を目指す上で課題と考えている事項」として、1年前期から4つの時期に分け、自己評価シートの表を参考に、どの項目が特に身についたのかをまとめるものとして、学生が学習成果と課題に関する自由記述の表も設定した。

自己評価シートの指標のうち、特に本学の学生できちんと身につけてほしい指標として「4遊びと生活を柱とした幼児教育の基本を理解している」「12子ども一人一人の発達の課題を理解し、個々の子ども

表1. 教職に必要な資質能力についての自己評価シートと結果

N = 48

事項	視点	答 申 指 標	1年次前期終了	2年次前期終了	標準偏差
			平均	平均	
使命感や責任感、教育的愛情	教職の意義・学校教育についての理解	1 教職の意義や教員(保育者)の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解している	3.71	3.98	0.64
		2 教育の理念、教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を習得している	3.04	3.49	0.58
		3 学校教育の社会的・制度的な性質や学校の経営の側面についての基礎的な知識を習得している	3.10	3.48	0.59
		4 遊びと生活を柱とした幼児教育の基本を理解している	3.94	4.09	0.62
		5 保護者や地域との連携・協力の意味と重要性について理解している	3.88	4.06	0.73
	課題探求力	6 特別支援教育、預かり保育などの学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができる	2.90	3.47	0.95
		7 教職に向けての自己の課題を認識し、その解決にむけて学び続ける姿勢を持っている	3.98	4.13	0.65
子ども理解や学級経営	子どもの理解・集団理解力	8 子ども理解のために必要な心理・発達論的な基礎知識を習得している	3.48	3.66	0.60
		9 集団の性質や集団形成に関する基礎理論・知識を習得している	3.29	3.68	0.63
		10 個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解している	3.35	3.70	0.75
		11 特別支援教育についての知識や特別な支援を必要とする子どもへの対応の方法を理解している	2.15	3.02	0.99
		12 子ども一人一人の発達の課題を理解し、個々の子どもに応じた関わりができる	3.23	3.74	0.79
	コミュニケーション力	13 子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができる	4.00	4.17	0.67
		14 子どもに積極的に関わったり、コミュニケーションをとることができる	4.23	4.43	0.62
社会性や対人関係能力	他者との連携・協力、社会性や対人関係能力	15 他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができる	4.21	4.38	0.68
		16 他者と共同して保育を企画・運営・展開することができる	3.08	3.66	1.07
		17 集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	4.06	4.30	0.66
		18 集団において、率先して自らの役割を見つけたたり、与えられた役割をきちんとこなすことができる	3.75	4.06	0.67
		19 挨拶、言葉遣い、服装、他人への接し方など、社会人としての基本的な態度やマナーなどが身についている	3.98	4.19	0.65
保育・教科の指導力	教育方法・教育課程・学級経営に関する基礎的な知識・技能	20 教育課程(カリキュラム)の編成に関する基礎的な知識を習得している	2.35	3.15	0.86
		21 幼稚園教育要領の内容や、教育の5領域の内容を理解している	3.62	3.81	0.71
		22 遊びを通しての指導や環境を通した指導に関する基礎理論・知識を習得している	3.46	3.74	0.71
		23 基本的生活習慣の指導や内容に関する基礎理論・知識を習得している	2.92	3.64	0.71
		24 指導法に関する基礎理論・知識を習得している	2.40	3.19	0.80
		25 教材や遊具などについての基礎的な知識を習得している	2.60	3.41	0.58
		26 指導案の作成に関する基本的な知識を習得している	3.21	3.91	0.55
		27 学級経営・クラスづくりに関する基礎的な知識を習得している	1.44	2.83	1.19
		28 情報教育機器の活用についての知識を習得し、活用することができる	2.98	3.49	0.83
		保育実践力	保育実践力	29 これまで履修した教科(音楽)に関わる科目の内容を習得している	3.83
30 これまで履修した教科(美術)に関わる科目の内容を習得している	3.77			3.98	0.74
31 これまで履修した教科(体育)に関わる科目の内容を習得している	3.81			4.02	0.74
32 教材を分析し、教材研究を生かした保育実践を計画することができる	1.77			3.21	0.86
33 子どもの主体性を尊重し、遊びを中心とした保育や設定保育を構想して指導案にまとめることができる	2.71			3.62	0.71
34 保育を実践する際、子どもの姿を捉え、子どもの反応に的確に応じながら保育を行うことができる	3.10			3.43	0.68
35 子どもへの説明の仕方や話し方など、保育を行う上での基本的な表現の技術を身につけている	3.33			3.60	0.74
36 保育実践後に子どもへの指導・援助について評価・反省し、次の保育実践に活かすことができる	3.10			3.87	0.71
37 月案(や週案)などの長期的な指導案を作成することができる	0.79			1.49	1.60

もに応じた関わりができる」「26指導案の作成に関する基本的な知識を習得している」「34保育を実践する際、子どもの姿を捉え、子どもの反応に的確に応じながら保育を行うことができる」「36保育実践後に子どもへの指導・援助について評価・反省し、次の保育実践に活かすことができる」「37月案（や週案）などの長期的な指導案を作成することができる」等の保育実践に重点を置いた指標を挙げた。また「29.30.31これまで履修した教科に関わる科目の内容を習得している」は、音楽、美術、体育の3つの科目を別々の指標として挙げ、教科別に学生の学習状況を評価することにした。

4. 「教職実践演習」の授業内容

1) シラバスの作成

教職実践演習の授業を行うにあたり、授業の目的や目標、各回の授業の到達目標、授業の具体的内容やスケジュール等の授業設計を担当教員間で話し合い、シラバスを作成した。

授業の目的は、教職実践演習を通じて、学生が教職課程および保育士養成課程の知識・態度・技能を統合的に学び、保育者（幼稚園教諭・保育士）としての確かな実践力を修得することとし、到達目標は、

保育者として求められる「使命」「責任感」「教育的愛情」を理解する、保育者として求められる社会性や対人関係調整力を身につける、保育者として求められる子ども理解力および学級経営力を身につける、保育者として求められる指導力を身につけることとした。成績は、出席状況や態度、模擬保育の発表や課題レポートの提出等で評価することにした。授業内容は、表2のとおりである。

表2. 教職実践演習の授業内容

授業回数	活動内容
第1～2回	グループワーク（保育者に求められる資質能力をグループで話し合う）【話し合い120分、発表60分】
第3～8回	現職教員授業（教材研究と教育内容の指導方法）
第9～11回	模擬保育・指導計画の作成と準備（学生がグループに分かれて活動）
第12～14回	模擬保育・実践（ロールプレイ、相互評価）
第15回	模擬保育の評価、総括（保育者としての自己評価）

2) 教職実践演習の授業内容

(1) グループワーク

教職実践演習の最初の授業では、学生がこの時期に、保育者としてどのような力が身につけているのか、また保育者に求められる力とは何かを学生自身が確認することからスタートすることにした。

学生は、教職実践演習を開始する前に、保育所実習10日間を2回、幼稚園実習4週間を終了しており、保育者に求められるものや自分の保育者としての実力を実感し認識している時期である。それゆえ、学生が実習内容を思い出したり、履修カルテの自己評価シートを見ながら、保育者としての現在の自分の力量を知り、保育者としての自己課題に気づくことでさらなる学びにつなげることを目標にした。そこで「学生から保育者へ巣立つ！」というキャッチフレーズを掲げ、ワークショップ形式のラベルワークの手法を用いたグループワークを行うことにした。具体的には、学生が学んだことや身につけたことを付箋に書き、模造紙に貼りながら話し合い、グループでまとめた後、全体に向けて発表し、学んだことや今後の課題を全体で共通理解するものである。学生51人のうち、グループは議論の進めやすさを考慮し、1グループ5.6人で合計9グループとした。

(a) グループワークの授業の目的

保育者に求められる資質・能力の理解

- ・自己の実習や履修カルテに照らして、保育者に求められる資質や能力が理解できる。
- ・保育者としての自己の特徴や長所を確認すると共に、自己課題を発見できる。
- ・グループで話し合い、協力してグループワークができる。

(b) グループワークの授業内容（第1～2回）

付箋に記入する（第1回）

「学生から保育者として巣立つ！」を念頭に、付箋に以下の内容を1枚1項目で書く。

- A. 2年次の実習のことを思い出し、指導を受けた保育者からこういう力が短大で身につけている、実習中にこういう力がついたと評価された

こと（指導を受けた保育者から直接ほめられたことや実習日誌で評価されたこと）、実習中に身についたと思う事項を書く。また、履修カルテの自己評価シートを見ながら、短大2年間の学びの過程で学び習得したことを書く。

B. 実習中に指摘された保育者としての今後の課題面や実習中に気づいた保育者として必要な力や、保育者になるにあたり自分の弱いところ、残りの短大生活で身につけるべき課題面を書く。
グループでまとめる（第1.2回）

A. Bの内容について、模造紙に貼りつけ、グループメンバー全員で発表する。次に、内容の似通ったもの、共通するものを集めたりグルーピングしていき、最終的に自分たちの考えを図式化し、ペンで模造紙上にまとめていく。最後に、図にまとめた内容を一言で表す「テーマ（“学生から保育者に巣立つ”という問いに対し、グループで最終的にまとめた答えを簡潔に言い表したもの）」をつける。

全体に向けて発表する（第2回）

グループ順に前に出て、グループでまとめた模造紙を使いながら発表する。（1グループ5～6分）

活動を評価する（第2回）

同じグループ内の学生に対し、「グループワーク評価シート（個人用）」を使い、本活動全体のピア評価を行い、同時に自己評価も記入する（図1）。また、学生が各自、「授業ふり返りシート」

教職実践演習「グループワーク評価シート」(個人用:自己評価・ピア評価)					
グループ	番号	氏名	日付	月	日
自分・()さんを評価します。					
[1] 課題に真剣に取り組んでいた	5	4	3	2	1
[2] 自分の意見を積極的に伝えていた	5	4	3	2	1
[3] 相手の意見をしっかり聞き、理解しようとしていた	5	4	3	2	1
[4] 話の進行、内容の整理、展開のヒントなど、議論を活発にする役割をしていた	5	4	3	2	1
[5] 考えを掘り下げ、グループの意見としてまとめようと努力していた	5	4	3	2	1
[6] 相手へのコメント（良いところ、もっと良くなることを書いてあげましょう）					

図1. グループワーク・模擬保育（計画・準備）評価シート

に授業で学んだことや気づいたことを記入する（図2）。

(2) 現職教員の授業内容

教職実践演習は、学校現場の視点を取り入れる観点から、必要に応じて教育現場の教員又は教員勤務経験者を講師とした授業を含めることが望ましいとされており、本学でも現職教員による授業を取り入れることにした。その際、教職実践演習は、2年後期の学びの最後の時期に設置されていることを考慮し、模擬保育の参考となり、保育の実践に直結する保育内容や幼児への指導法に重点を置く授業内容となるように、現職教員に相談・依頼した。

(a) 現職教員の授業の目的

学級経営力や保育実践力の向上

- ・子ども理解の仕方や学級経営(クラス運営)、指導方法を理解できる。
- ・クラス担任の役割や実務、他教員との協力のあり方が理解できる。
- ・題材や教材研究を実施し、教材や指導形態、指導の評価が理解できる。

(b) 現職教員の授業内容（第3～8回）

現職教員の授業は、幼児を対象とした保育実践場面の活動のヒントとなるような教材研究や指導法を学ぶ授業とした。後半で行う模擬保育につながるように、学生が多くの保育内容を知り、保育活動のイメージを持つことを目指し、学生が幼児に対する様々

教職実践演習「授業ふり返りシート」		
グループ	番号	氏名
この授業であなたが学んだこと、気づいたことについて書いて下さい		
授業内容:グループワーク	月	日～月

図2. 授業ふり返りシート

な指導法を経験する中で、保育者としての言葉かけや幼児へのかかわり方、教員としての立ち振る舞いなどの総合的な実践力を高め、教員としての姿勢や心構えを身につけることを目的とした。

(3) 模擬保育の実践

模擬保育については、今まで短大で学んできたことを踏まえ、学生が幼児を対象とした20分程度の保育をグループに分かれて計画し、その保育実践を指導計画にまとめる活動を3回の授業の中で進めていくことにした。その後の3回の授業では、各グループで考えた模擬保育の内容を順番に発表し、保育者として子どもたちを指導していく実際に模擬的に行い、保育者として発表しない学生は、クラスの幼児として役割演技(ロールプレイング)をする。実践後に発表者には他者評価を行い、模擬保育への評価をフィードバックすること、担当教員は、学生の模擬授業の様子をビデオカメラで撮影し、最後の授業でそのビデオを学生全員と見ながら、全体で評価を行うことにした。

(a) 模擬保育の授業の目的

教材作成と模擬保育の実践、発表と評価

- ・題材探究や教材研究を行い、保育者としての表現力や子どもの反応を生かした指導計画を立案する。
- ・子どもへの指導方法と環境構成の方法などに配慮した模擬保育ができる。
- ・グループで話し合い、役割分担をしながら、協力して活動に取り組むことができる。
- ・模擬保育を分析する中で、自己や他者の良い点や改善点を発見し、評価できる。

(b) 模擬保育の活動内容 (第9～15回)

教材研究と指導計画の作成 (第9～11回)

- ・グループで教材研究を行い、子どもを対象とした模擬保育案を考える。3.4.5歳児のクラス担任として20分程度の部分指導計画を立案する。
- ・授業や実習などで取り組んだ活動以外を考える。体育、美術工芸、音楽などの範囲を組み合わせ

たり、保育内容の5領域を横断的に捉えた活動、子どもが楽しく取り組める活動を発想する。

- ・模擬保育で対象とする子どもの人数は、20～35人のクラスを想定し、活動にふさわしい発表場所や人数を指導計画に書き入れる。
- ・指導計画に盛り込むことは、「グループとメンバー」「発表のテーマ」「問題意識(この活動を取り上げる理由)」「予想される子どもの姿や保育者の願い」「対象・人数」「設定場所」「活動のねらい」「教材観・活動内容」「活動の具体的展開」等(様式自由)である。教材などの必要資料があれば添付する。指導計画は、印刷したものを発表前に全員に配布する。
- ・発表時のグループの役割分担を決め、保育者は主担当と裏方の2人か、副担当を加えた3人で進める。模擬保育の発表中に、導入、展開、まとめ等の活動の節目で学生が役割を交代し、全員が「主担当」と「裏方」の役割を担当しながら進めるよう計画する。
- ・第9回～11回の授業の最後に、グループでその時間に活動した内容を「グループ活動報告書」に記入し、担当教員に提出する。
模擬保育の発表・活動の評価 (第12～14回)
- ・1グループ20分の時間で、模擬保育の発表を行

教職実践演習「模擬保育(実践)評価シート」(個人用:自己評価・他者評価)

発表日	月	日	グループ	番号	氏名()	テーマ
模擬保育を発表、または参加した評価を10段階でつけて下さい。5,6を「普通」、7,8を「良い」、9,10を「とても良い」、逆に4,3を「もの足りない」、1,2を「とてももの足りない」と考えて下さい。						
【評価視点】						
[1]	テーマ設定や活動のねらいは、子どもの興味・関心を引きつけるものであった					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
[2]	題材探究や教材研究がしっかり行われ、発想豊かな発表内容として工夫されていた					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
[3]	場の設定、活動時間や流れ、予想される子どもの活動などの計画が適切であった					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
[4]	保育者の行動や言葉かけは、意図的で適切であり、保育者としての表現力を生かしていた					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
[5]	保育者の行動や言葉かけは、子どもの反応に適切に柔軟に対応していた					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
[6]	本日の発表や実施は、準備が十分にでき、スムーズであった					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
[7]	総合的にみて、満足いく発表であった(発表時)					
	総合的にみて、自分にとって参考になる発表であった(参加時)					
	1	2	3	4	5	6 7 8 9 10
◆質問・意見・感想						

図3. 模擬保育(実践)評価シート

う。1コマで3グループ発表する。

- ・発表したグループの模擬保育を評価する。「模擬保育評価シート(個人用)」に発表者以外は他者評価を、発表者は学生個人で自己評価を記入する。他者評価は記入後に集め、グループに渡す(図3)。

模擬保育の反省と評価(第15回)

- ・模擬保育を録画したビデオを見ながら、発表グループ別に模擬保育の評価を話し合ったり、参加者の評価を見ながらグループでまとめ、「模擬保育評価シート(グループ用)」(図3)に記入する。
- ・「模擬保育(計画・評価)評価シート(個人用)」(図1)に各自記入する。
- ・担当教員から、模擬保育に関する総評を行う。
- ・学生が各自「授業ふり返しシート」に記入する(図2)。

5. 授業の総括と成績評価方法

教職実践演習の成績は、テストを実施せず、授業の取り組みと最終課題物となる「履修カルテ・学習ポートフォリオ」の提出で評価する。最終課題物の「履修カルテ・学習ポートフォリオ」とは、教職実践演習で作成した以下の文書を指定のファイルにはさみ込んだものである。

1) 最終課題物(履修カルテ・学習ポートフォリオ)の内容

「履修カルテ(最終版)」

- ・2年後期の内容まですべて記入したものが「履修カルテ(最終版)」になる。

第1・2回 グループワークの資料

- ・「グループワーク評価シート(個人用)」³⁾(図1)

第3～8回 現職教員の授業資料

- ・現職教員からの課題物

第9～15回 模擬保育の資料

- ・「模擬保育(計画・準備)評価シート(個人用)」³⁾(図1)
- ・「模擬保育(実践)評価シート(個人用)」⁴⁾

(図3)

- ・「模擬保育(実践)評価シート(グループ用)」⁴⁾(図3)

「授業ふり返しシート」

- ・グループワーク、現職教員授業、模擬保育(指導計画の作成・準備、模擬保育(発表)の4つの活動に関する自らの学びについてまとめる(図2)

「自己評価・まとめシート」

- ・履修カルテの「自己評価シート」の2年後期終了時の自己評価をもとに自己分析する。
- ・「自己評価・まとめシート」の“評価の高い指標に関する分析・考察”の欄に、必要な資質能力の指標の項目欄ごとに自己評価の高い指標と低い指標はどれか(学生が身につけている/いないと思う指標)を分析・考察して記述する。
- ・「自己評価・まとめシート」の“その他に関する分析・考察”の欄には、項目別の自己評価の高い/低いに関する分析以外のうち、自分で気づいたことなどを書く。また、「履修カルテ(最終版)」を見て、1年前期から2年後期の間に、特に評価が高くなった指標(2年間で成長した指標)や評価が低い・変わっていない指標(これから身につけるべき課題指標)について分析・考察する。
- ・「自己評価・まとめシート」の“卒業・今後に向けての課題”の欄には、“評価の高い指標に関する分析・考察”や“その他に関する分析・考察”を踏まえ、今後の自分の課題となる指標や項目を書く。

過去に作成した履修カルテ

- ・1年前期分から、古い順番にとじる。

学習ポートフォリオ

- ・短大で学んだ成果物の代表的なものをとじる。分量が多い場合は厳選し、1冊にまとめる。

2) 教職実践演習の成績評価方法

学生の成績評価の評価者は、現職教員の評価と合わせて教職実践演習の担当教員3名で協議し、成績

をつけることとした。また、成績評価は、出席状況や態度(20%)、履修カルテ・学習ポートフォリオの最終課題物(現職教員の提出物も含む)(40%)、グループワークや模擬保育の取り組みと発表(各種評価シートやふり返しシートも含む)(40%)により、総合的に判断することとした。

6. 教職実践演習開始直前の学生の学修実感

教職実践演習の授業を開始するにあたり、短大1年半における学生の学修実感について、1年次前期と2年次前期の科目終了後に記入した自己評価シートをもとに検討した。

1) 倫理的配慮

平成23年10月に、保育学科2年生に対して研究目的、方法等を、担当教員が研究協力依頼の文書を用い口頭で説明し、学生個々の研究参加の自由意思が阻害されないように配慮した。また、個人が特定されないこと、データの慎重な取扱等について説明し、研究協力の同意の意思があれば署名を依頼して了承を得た。

2) 自己評価の結果

保育学科2年生51名中、研究協力の同意を得られた48名の履修カルテを対象とし、自己評価シートの得点を各指標で比較した(表1)。網掛け部分は平均値が4.0以上と、3.0未満の指標である。

37指標すべてにおいて、1年次前期終了時(以下1年次と記す)より2年次前期終了時(以下、2年次と記す)の得点が高くなっていた。平均値4.0以上の指標が1年次では4に対し2年次では10、逆に3.0未満の指標が1年次では10あったが2年次では2と減っている。学生は1年次と比較して、学べたという実感を高めていることが推察される。

1年次から平均値4.0以上の高い自己評価を示したのは「13子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができる」「14子どもに積極的に関わったり、コミュニケーションをとることができる」「15他者の意見やアドバイスを耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができる」

「17集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる」の4指標であった。さらに2年次には、「18集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができる」「19挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な態度やマナーなどが身につけている」でも4.0以上の高い自己評価を示していた。これらコミュニケーション力、社会性や対人関係能力については、1年次から「できた」という自信をつけ、2年次でも一貫して学んだ実感を強く持っている現状が明らかとなった。

これらの資質能力は、保育・教科の指導力の指標(指標20~37)で示される知識や技能、表現力のような見える能力というよりは、むしろ関心、価値観、思考力、判断力、意欲などの見えにくいところの能力である。梶田は、見えにくいところの育ちが見える学力を支えている「冰山モデル」により、体験・感動と知識の往復作用の重要性について述べている⁵⁾。学生は入学後すぐに本学科の伝統的かつ特色ある授業の「ほいくまつり」の活動に加わり、特に2年生は、自らがリーダーとなって1年生をまとめたり、対外的な交渉を重ねるなど、様々な体験をしながら喜びや感動を味わっている⁶⁾。このような経験が、まず見えにくいところの育ちを後押しして1年次からのコミュニケーション力、社会性や対人関係能力の自信に実感としてつながっていると考える。

また、「4遊びと生活を柱とした幼児教育の基本を理解している」「5保護者や地域との連携・協力の意味と重要性について理解している」「7教職に向けての自己の課題を認識し、その解決にむけて学び続ける姿勢を持っている」といった教職の意義・学校教育についての理解や課題探求力、「29、30、31これまで履修した教科(音楽、美術、体育)に関わる科目の内容の習得」も自己評価が高い。

1年次に平均値3.0未満の低い自己評価を示した指標は、「20教育課程(カリキュラム)の編成に関する基礎的な知識を習得している」をはじめとした教育方法・教育課程・学級経営に関する基礎的な知識・技能に関するものが多かった。しかし、授業の進行に伴い、2年次にはこれらについても大部分は

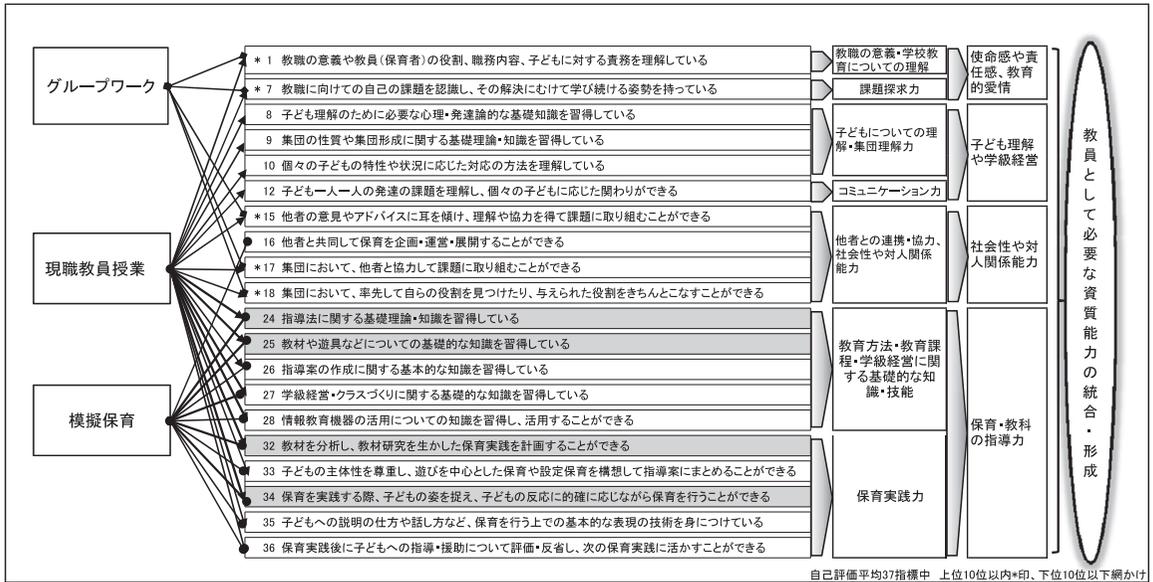


図4. 教職実践演習で強化する指標

学んだ実感を高めている。

一方、2年次においても自己評価が低い指標は「27学級経営・クラスづくりに関する基礎的な知識の習得」「37月案(や週案)などの長期的な指導案の作成」であった。これらは、0点(未学習)と回答した学生がそれぞれ4名、22名おり、平均点の低さにつながっている。実際、これらの内容を含む科目「教育方法の研究」「保育内容総論」は2年後期に開講されており、得点が低いのはやむを得ない面もあると捉えている。逆に5点と高い自己評価をしている学生がいるのは、自らの主体的な学習により身につけた成果かもしれないし、指標の認識の不十分さや自己評価の稚拙さによるものと捉えることもできる。学生の主観的な基準で自己評価されているので、何がどこまでできれば「できた」と評価するのはかなり幅があるが、前述したグループワークの中で評価基準を具体化しながら、深化できるものと考えている。また2年前期終了時で自己評価の低い指標については、指標の該当する2年後期の授業科目の中で学生に身につけさせる必要があり、保育学科の教員全体で授業内容の見直しや改善をする必要がある。

3) 教職実践演習で強化する指標

教職実践演習の授業内容に対応している自己評価指標は、全37指標中20指標あると考えた(図4)。図4の中で、自己評価平均が37指標中上位10位以内の高い指標は*印を、下位10位以下の低い指標は網掛けで示した。図4のとおり、教職実践演習の授業内容に、高い指標、低い指標ともに5指標ずつ含まれている。

高い指標は中教審答申の「使命感や責任感、教育的愛情」や「社会性や対人関係能力」であるが、これらの事項は、教職実践演習のグループワークや現職教員授業の演習を通してさらに力を高められると思われる。

一方で、低い指標は「教育方法・教育課程・学級経営に関する基礎的な知識・技能」や「保育実践力」といった「保育・教科の指導力」の事項であるが、これらの指標を高めるように現職教員授業、模擬保育の演習で強化し、学生の学びが深まるようにしていきたい。

以上、教職実践演習の授業は、保育者に求められる広範にわたる資質能力を統合的に扱っていることから、個々の学生が自己評価の低い指標を卒業前の最後の学期において、さらに向上させることに資す

る内容になっているといえる。このことは冒頭に記した「教員養成課程における学生の学びの質の向上」を保証することにつながると考える。加えて、本授業で学生が得た知見及び自己評価指標等は、卒業後の自己学習への大きな糧となるものと予測し期待するものである。

7. おわりに

教職実践演習の授業は、平成23年度後期に本学保育学科で初めて行われる授業であり、実際のところはこれから授業を実施し、内容を吟味していく必要がある。しかし、授業内容や授業構成を授業担当者間で話し合いながら、教職実践演習を短大2年間の学びを統括する授業内容に設計できたことは大きな成果であるといえる。本学保育学科の学生が短大2年間の学びの過程で身につけるべきことは何かを考え、学生への教育に具体的に反映させていくことが、豊かな人間性と優れた専門性を兼ね備えた、質の高い保育者の育成につながるものと考えられる。

今回の教職実践演習の事前準備や授業構想は、実際に授業を実施したのち、点検及び授業内容の工夫・改善を重ね、保育者養成課程における教職実践演習の1つの授業モデルとなるよう完成度を高めていくことを目指している。

今後の展望としては、学生の2年間の学習過程と教職実践演習の取り組みを照合し、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに関わる保育者養成課程の全容を掌握することができるものとなるよう、研究を深めていく考えである。そして本研究の成果が、保育学科教員間のさらなる教育連携の強化に貢献し、保育者として社会に巣立っていく学生の質を保証する、より確かな教育の営みへと展開することを目指したい。

注・引用文献

- 1) 文部科学省「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」(『教職課程認定申請の手引き』平成22年度改定版)、2010年
- 2) 「教職実践演習」は、幼稚園教諭二種免許状取得のための教職課程科目であるが、本学では保育

士養成も同時に行っている。平成24年度以降については「総合演習」に代わり、保育士資格のための科目「保育実践演習」の内容も含むため、本学では教職実践演習の科目名を「保育教職実践演習」としている。

- 3) グループワークや模擬授業の指導計画立案において、学生が自己評価とピア評価を行うシートは「グループワーク・模擬保育(計画・準備)評価シート」であるが、グループワークと模擬保育では同一の評価シートを使うことにした。それは、2回の活動の中で評価項目を意識させ、評価項目を念頭に置くことで、学生により意欲的な活動を促すことをねらいとしている。
- 4) 模擬保育の発表の評価は、発表した学生個人や子ども役をしていた学生も 図3の「模擬保育(実践)評価シート」を元に自己評価や他者評価をする。同時に、グループで話し合っていく評価についても、図3の同一の項目が含まれた評価シートを使うが、それは学生個人の自己評価がグループ全体の意見としてまとめられやすいように配慮したためである。
- 5) 梶田叡一・加藤明「改訂実践教育評価事典」文溪堂、2010年、p.18-29
- 6) 小山優子・白川浩・福井一尊「『ほいくまつり』活動を通じた保育者養成の意義() - 学生指導と教員連携の観点から -」島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要第49号、2011年、p.51-60

参考文献

- 岡山大学教育学部「実践的指導力育成のための学びの航跡 教育実践ポートフォリオ(幼児教育コース)」[第2版] 2010年
- 相模女子大学「教職実践演習・履修カルテ」(<http://www.sagami-wu.ac.jp/work/education/record.html>) (2011/10/30アクセス)
- 佐藤浩章『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部、2010年
- 明治大学「明治大学教職課程履修カルテ」(<http://www.meiji.ac.jp/shikaku/risyu-karte/>) (2011/10/30アクセス)